

〔巻頭言〕

「愧（は）じる」ことと進むこと

札幌学院大学大学院 臨床心理学研究科 葛西俊治

3月は年度末の慌ただしい時期です。院生2年生は修論執筆からようやく解放され、ホッとする間もなく新たに仕事に就く算段へ気持ちと生活を切り替える時期です。M1の院生も単位取得の実績に喜ぶ間もなく、センター実習の重さと修論研究の責め苦（少し大げさですが）へ向かう時期となります。

そうした時期に開かれた拡大事例検討会には、かつての安岡ゼミの修了生と私のところの修了生も忙しい業務の中、駆けつけて来てくれていました。のんびり「お久しぶりです」という間もなく、安岡譽先生の「臨床ミニセミナー」のお話しが始まりました。黒板には先生の思いをのせた五言十行の漢詩が書かれていました。力のある精神科医となるべく、師を求めて西海に向かう…という青年期の安岡先生の熱い志しの漢詩ですが、私には特に次の三行が身に染みました。

愧不及恩師 — 恩師に及ばざるを愧（は）じる

老残壯士心 — 老いて残る壮士の心

知力猶可倚 — 知力、なお倚（よ）るべく

安岡先生は自らの師である西園昌久先生の『精神分析治療の進歩』金剛出版（1988）の資料を示し、「身体的自我の構造」における象徴的な意味での「父母」が身体的には「筋肉と皮膚」という対比によって構成されていることを解説されました。皮膚的な感覚世界は母との相互的な関係の気配の中にあります。それに対して、筋肉は物に、地面に、そして人へと身を進めていく「力」と意志とに結びついています。私はこれまでの身体心理的アプローチの中でそうした対比を体験してきましたが、そのことがすでに26年前に描き出されていたことを知ったのです。

「光陰矢のごとく、少年老いやすく、学成り難し」という漢詩「偶成」が示すように、学の遠く成り難いことにふと後悔の念が募ってきます。しかし、安岡先生は恩師にはまだ遠く及ばないことを「愧（は）じる」と嘆くだけではなく、そのうしろに力強い二行が続くのです。意気盛んに「老いてもまだまだ元気だよ、知は力だよ、まだ先に進むよ」と説くのです。

毎週の事例検討会では、インタークの報告、ケースの報告が行われます。経験を積みつつある院生の発表に対して、経験あるセンター研究員から指摘やコメントがなされます。経験からほとぼり出るコメントは丁寧であっても鋭く、若く発展途上の院生の胸に迫ることもしばしばです。これまで一万人以上の面談を経た安岡先生にして、年を経てもなお「愧（は）じる」のであれば、私たちはきっと自らの未熟さに十分に気がついていないのだといえます。若い院生も教員も共に、人を理解して学ぶ立場にある者としてそれぞれに道を進んで行かなければとの思いを深めるセミナーとなりました。

この場を借りてあらためて安岡譽先生にお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。